

# 不都合な共感

## 『日陰者ジュード』における共感と進化論

福原 俊平

### 1. はじめに

『日陰者ジュード』(Jude the Obscure)では、結婚制度に関するトマス・ハーディ(Thomas Hardy)の信念が表れているが、その際に動物に関する比喻や表現がしばしば登場する。結婚制度によって苦しめられるスーは、畏にとらえられた動物として描かれる一方、スーと対照をなすアラベラは、動物的な本能に忠実な存在とされる。そして、『ジュード』には動物愛護思想も見られるが、同時に共感のアイロニーも強調される。当時の進化論においては、共感重要なテーマであり、人間にとって共感する能力は道徳性の礎であり、社会の文明化という人類の進化の原動力とされた。ハーディ小説においても、主人公の道徳性は他者の苦難や動物の苦しみに共感する感受性によってしばしば表現されている。しかし、『ジュード』においては、共感の能力こそが苦痛の源泉となる。本発表では、『ジュード』においては、社会改良の原動力であるはずの共感に、アイロニーがつきまとっていることを示しながら、ハーディの共感に対する複雑な態度を探求する。

### 2. 裏切られる共感

ハーディは動物虐待に強く反対をしており、『ジュード』における豚の屠殺の場面の著作権を動物愛護運動のために寄付し、動物愛護団体の定期行物に掲載された。ハーディにとって、かわいそうな動物を描いて読者の共感に訴えることは、社会改善のための重要な手法であった。しかし、『ジュード』において興味深いのは、共感にはアイロニーが伴われることである。まず、共感する能力はしばしば不幸な結果をもたらす。ジュードは少年時代から心優しい人間であり、畑で打ち子を鳴らして鳥を追い払う仕事をしながらも、鳥たちの空腹に同情して、追い払うのをやめてしまう。その結果、彼は雇い主のトラウザムにひどく怒られることになる。

ジュードの人生において、共感の気持ちは裏目に不出続ける。別れた後でもアラベラが、リトル・ファーザー・タイムの対処に困って彼のもとにやってくると、「不都合な共感」を感じて、彼女をはねのけることができない。スーもまた利己主義を否定する気高い精神の持ち主であるため、二人はリトル・ファーザー・タイムを引き取ることになる。しかし、それが悲劇につながる。アラベラの子供であるリトル・ファーザー・タイムが、スーの子供たちを殺害した上で自殺してしまい、非常に陰惨な形でジュードとスーの思いやりの気持ちは裏切られてしまう。

### 3. 二人の女性と動物的表現

『ジュード』においては、苦しむ動物へ同情がしばしば描かれるが、アラベラとスーという女性登場人物の描写においても、動物にまつわるエピソードや動物の比喻がしばしば用いられる。ただし、その動物の種類は異なり、動物の異なる側面が強調される。アラベラはしばしば動物を利用して、積極的にパートナーを捕まえようとする。ジュードとの恋愛は、アラベラが豚の性器を投げつけて彼の足を止めることから始まる。また、ジュードとの関係を深める場面では、逃げた豚を追いかけていった結果、二人きりになるという流れである。さらに、アラベラはコーチンの卵を孵化させるためと言い、胸の谷間に卵をはさみジュードを誘惑する。彼女は性的に積極的であり、肉感的な魅力に自意識的である。他方で、スーは自由を奪われ、苦しめられる動物に喩えられる。彼女は自由のない家畜であり、カゴの中の鳥である。畏にとらえられたウサギの苦痛の声を聞く場面では、結婚制度という畏がスーにもたらす苦しみが表現されている。

スーとアラベラの対照性が明確に示すものとして、鳩を用いた二つエピソードがあげられる。スーに関しては、引越費用捻出のためジュードとともに所持品を売り払うことになり、スーが飼っていた鳩も鳥肉屋に売却することになる。しかし、売却したものの、鳩たちを哀れに思ったスーは、店主の眼を盗んで鳥かごから逃がしてしまう。それに対して、アラベラは鳥の命など気かけない。ヴィルバート医師から惚れ薬を購入するのだが、それは約100羽の鳩の心臓をから抽出されたのだという。スーが殺される鳩に同情するのに対して、アラベラは自分自身の動物的な欲求を満たすために鳩の命を利用するのである。

### 4. 結婚と動物性の二つの顔

アラベラとジュードは結婚観においても大きく異なるが、その違いも動物に関連した表現で示される。スーは結婚を本能に基づく動物的な行動だと考え、因習的な結婚制度を批判する。それに対して、アラベラの結婚は動物的本能の産物である。ただし、罫としての結婚制度から自由なのは、皮肉なことにアラベラである。スーやジュードと異なり、アラベラは結婚制度に対する知的な疑問を抱かない。しかし、彼女は制度の網をくぐり抜ける。ジュードと法的に結婚したまま、オーストラリアでカートレットと結婚し、カートレットの死後は、またもやジュードを誘惑して結婚する。ジュードの死に際しても、次の結婚相手探しを優先する。彼女は欲望と必要性からパートナーを求め続け、結婚制度を時にすり抜け、時に利用する。そのようなアラベラの姿勢は簡単に否定するべきではないだろう。ハーディによるアラベラの生き生きとした描写には一種の愛着さえも感じられ、彼女の割り切ったプラグマティズムにも一面の真理がある。豚の屠殺の場面において、アラベラには動物愛護精神は微塵も見られないが、「大衆は生計を立てねばならない」という庶民の現実をしっかりと認識している。そのようなプラグマティズムは動物への哀れみによって否定しうるものではないだろう。

## 5. 共感の代償

『ジュード』において興味深いのは、動物愛護精神に満ちた行為には経済的な問題が付きまとうことである。ジュード少年は腹をすかせた鳥たちに同情してしまい、追い払わずに麦を食べさせるが、その結果として、農場主トラウザムは穀物の損害を被り、ジュード少年は失職することになる。あるいは、スーは鳥肉屋に飼っていた鳩を売るものの哀れに感じて逃がしてしまうが、その結果として、ジュードは鳩の代金を弁償しなければならなくなる。また、豚殺しの場面においても、豚が苦しまないように絶命させたことで、肉質が落ちて価格が下がってしまう。さらに、ジュードが豚の血の入った桶を倒してしまい、アラベラはブラック・プディングを作れなくなる。このように、動物に対する優しさには経済的な代償がついてまわり、動物愛護の理想に対する現実的な困難が示されていると言える。

動物愛護の限界が描かれる一因としては、ハーディの階級意識があげられる。ロナルド・モリソン (Ronald Morrison) によると、ハーディは動物愛護運動に賛同しながらも、階級的な理由から多義的な感情を抱いていた。動物愛護運動は中流階級が主体となった社会運動であり、労働者階級は動物を虐待する階級とされた。そのため、労働者階級出身であるハーディには、中流階級的な動物愛護運動に全面的に賛同することには抵抗があり、そのことが妻であるエマとの不仲の一因になっていた (68)。この点を考慮すると、アラベラとスーの対照性にも異なる様相が見られるだろう。動物の苦痛に対するスーの感受性が中流階級的であるのに対して、アラベラには労働者階級的な現実主義が染みついており、階級的な対立として読み取れることもできる。

思いやりや共感とは、進化論的に高度な能力であり、道徳的にも美德である。しかし、ハーディには、思いやりの行為も立場によって利害が対立するという複眼的な認識があり、それは主人公たちの婚姻関係にも表れている。スーがフィロットソンに対して、彼のもとから去ることを許してほしいと懇願するとき、スーが求めるのは動物愛護的な共感である。無力な彼女を苦しみから救うという思いやりの気持ちを求めるのである。そして、フィロットソンはその願いをかなえるが、彼自身は校長の職を失い、大きな社会的な制裁を受ける。スーとジュードの幸福は、フィロットソンの苦痛を対価として得られるのである。そして、リトル・ファーザー・タイムの自殺によりスーが変心すると、ジュードも同じ苦痛を味わうことになる。フィロットソンの元へと戻ったスーを訪ね、ジュードは彼女を説得しようとするが、スーの心は変わらない。説得に失敗した失意の帰り道、ジュードが目にするのは、少年時代に鳥追いをした畑につながる道である。少年ジュードはその空腹に同情して鳥たちを受け入れたが、現在のジュードはスーに追い払われてしまう悲哀がある。スーの動物愛護的な精神はジュードには向けられず、ジュードは二度とスーに会うことなく、病によって衰弱して生涯を終える。

## 6. おわりに

豚殺しの場面は動物愛護運動の啓蒙活動を手助けしたが、『日陰者ジュード』というテキスト全体においては、共感の効果は単純ではなく、アイロニーが込められている。共感の力に期待しながらも、社会を複眼的にとらえることができるからこそ、全面的には頼り切れないという、ハーディのアンビバレントな感情が表れていると言える。

## 引用文献

Hardy, Thomas. *Jude the Obscure*. London: Penguin, 1998.

Morrison, Ronald. "Humanity towards Man, Woman, and the Lower Animals: Thomas Hardy's *Jude the Obscure* and the Victorian Humane Movement." *Nineteenth Century Studies*. vol. 12, 1998, pp. 64-83.